

使徒言行録 20 章 25 節～32 節。「そして今、あなたがたが皆もう二度とわたしの顔を見ることがないとわたしには分かっています。わたしは、あなたがたの間を巡回して御国を宣べ伝えたのです。だから、特に今日はっきり言います。だれの血についても、わたしには責任がありません。わたしは、神の御計画をすべて、ひるむことなくあなたがたに伝えたからです。どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なさったのです。わたしが去った後に、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、わたしには分かっています。また、あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます。だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです」。

パウロは迫害を受けて困窮するエルサレム教会を支援するために異邦人教会からの献金を携え、ミレトスまで来た。五旬節までにエルサレムに行きたかったので、エフェソ教会の長老たちを呼び寄せ、別れの説教をした。パウロはまずエフェソで、言葉と行いにおいて、全力で主イエスの福音を宣べ伝えてきた過去について語った。そして、今から行くエルサレムでは、ユダヤ人から苦難を受けることは承知しているが、恵みの福音を証しする任務を果たすことができれば、この命は決して惜しいとは思わないと続けた。

そして、上記の説教につなげている。①「あなたがたが皆もう二度とわたしの顔を見ることがないとわたしには分かっています」。あなた方は再び私に会うことはない、死を覚悟して語っている。長老たちは厳粛な思いで、涙を流しながら聞き入ったことだろう② 私はあなた方の間を巡回して、主イエスの福音を語ってきた。だから今、はっきり言う。「だれの血についても、わたしには責任がありません」。私はどんな時でも、神の救いの計画について、あなた方にひるむことなく語ってきた。誰の血についても責任がないということは、誰かが滅びの道に陥ったとしても、その責任は私にはないということである。責任を問われることがないほど、福音宣教に励んできたと言っている訳である。パウロの信仰にかけた自信と満足を表した言葉である。このような言葉を言える伝道者はなかなかいないだろう。③ どうか、自分自身と教会の群れ全体に気を配ってほしい。聖霊は、主イエスの血によって建てられた神の教会を世話させるためにあなた方を長老として任命された。私が去った後、教会の群れを荒らす残忍な狼どもが入り込んでくる。また、あなた方の中からも、邪説を唱え弟子たちを惑わす人々も現れてくる。私が3年間、涙を流して教えてきたことを思い起こし、福音の真理に立って、しっかり目を覚ましていなさい。④ 今、神とその恵みの言葉とにあなた方を委ねる。「この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです」。主イエスの言葉は虚無と退廃ではなく、人を創り上げ、主イエスに倣う聖なる者として、神の恵みを受け継がせることができる。パウロは長老たちに、福音にしっかり立脚し、主イエスの血によって建てられた教会を守るように訴えている。